

主 題：あなたに与えられた賜物

聖書箇所：コリント人への手紙第一 12章4-7節

先日、私にとって少しうれしいことがありました。プレゼントをもらう機会があったのです。バレンタインのプレゼントを姪と英会話の生徒からもらいました。この二人は私以外にもチョコレートあげた相手があるのですが、それにはある共通点がありました。それは手作りのチョコレートに相手の名前が綴られて、メッセージも添えられていたことです。普段、親しく交わっている人にはより良いものをあげたいと子どもながらにも考えるのだなあと思いました。プレゼントをもらうのはうれしいことですが、反対にあげる場合はどうでしょう？その人の喜ぶもの、ふさわしいものをあげようと思います。

ここで私たちが考えてみたいことは、神もあなたにすばらしいプレゼントをくださっているということです。皆さんはそのプレゼントを把握しておられますか？救いのプレゼントは最もすばらしいプレゼントですが、それだけでなく、他にもすばらしいプレゼントを神は皆さんに与えてくださっているのです。今日はみことばからそのことを見て行きます。聖書の箇所を読みます。

コリント人への手紙第一12章4-7節「さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。:5 奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。:6 働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。:7 しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。」、ここからパウロは12-14章に「賜物」、神のプレゼントについて記して行くのですが、まず、そのように記すことになった背景について簡単に見ましょう。コリントの教会は賜物に関して間違った考えがあったのです。人の目に付く目立った働きはすばらしい賜物で、余り目立たないものは価値がない賜物だと考えていたこと、また、与えられた賜物を用いているいろいろな働きをするのですが、目立つような賜物をもっている人に対しては「あの人はすばらしく霊的な人だ」と評価し、目立たない賜物をもっている人は霊的でないと見なすという、そのような考えをもった人たちが集まっていたのです。それによって教会の中で人に優劣を付けるという状況になっていました。それに対してパウロは「あなたたちは間違っている。そのようなことは決してない。」と、神が与えてくださる賜物について書き記して行くのです。今日は、先ほど読んだ箇所から、クリスチャンに与えられた賜物について学んで行きます。それによって、皆さんお一人ひとりが賜物について正しく理解し正しく用いる者になっていただきたいと思います。

☆クリスチャンに与えられた賜物

1・賜物の原則 4-6節

賜物について、大きく分けて二つのことを見て行きます。まず、「賜物の原則」を考えて行きましょう。そして、ここから三つの原則を考えてみます。

1) 賜物は同じ御霊によって与えられる 4節

賜物は同じ御霊によって与えられていると教えられています。4節に「**御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、**」とあります。先ず、「賜物」とは何でしょう？それは「無償で、恵みによって与えられるもの」です。それゆえに、何か良いことをしたから得られるものではありません。その人がすばらしいから与えられるというものでもありません。ただ、一方的に恵みとして与えられるもの、それが賜物です。そして、賜物は何かをするときの力であったり、また、何かをする性質であったりします。それはみことばによると「**いろいろの種類があります**」。この「種類」ということばは「分配、分与」、つまり、分けて配る、分けて与えるという意味をもっています。御霊が賜物を分けて配っているということです。そして、この「種類」の動詞形がIコリント12:11に使われています。「**しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。**」、ここにある「**分け与えてくださる**」ということばがそれです。「**同一の御霊が……それぞれの賜物を分け与えてくださる**」というわけです。つまり、同じ御霊によって賜物が与えられていると言われているのです。

このように賜物は御霊によって分与されるのですから、当然、そこにはいろいろ種類があるわけです。では、その「賜物の種類」とはどのようなものがあるのでしょうか？ローマ人への手紙12:6-8をご覧ください。「**私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。:7 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。:8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。**」と、これらが御霊が与えてくださる賜物であると言うのです。ここに記されている賜物のうち、実

際に、当時あった賜物で現在はもう存在しない賜物があることに私たちは気をつけておかなければいけません。I コリント 12 章には「いやし」「奇蹟」「異言」の賜物が記されていますが、これらは今はもう失せてしまったものです。聖書という神の完全な啓示の書が与えられているゆえに、これらはもう必要がないのです。しかし、その他の賜物は現在もあることを教えています。

先ほども見た通り、御霊はその人にふさわしい賜物を分け与えてくれています。ローマ書にも「**与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っている**」とある通りです。つまり、一人ひとりに神が与えてくださった賜物はそれぞれ違う、まったく同じものはないということです。そして、その賜物は同じ御霊によって与えられるのです。だから、4 節の最後には「**御霊は同じ御霊です。**」と記されているのです。もし、与える人がたくさんいるなら、そこには不公平が起こるかもしれません。しかし、神がクリスチャンにくださる賜物は同じ御霊によって、その人にふさわしいものであるとみことばは私たちに教えます。

では、その賜物をもっている人はどのような人でしょう。御霊をもっている人です。御霊を得ている人は、イエス・キリストを自分の救い主と信じ、そして、イエス・キリストを自分の主として従って行こうとします。12:3にはこのように記されています。「**…神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。**」、つまり、イエスを主と告白する人です。つまり、皆さん、この賜物はクリスチャンに与えられていると、そのように教えているのです。

2) 御霊は同じ主のために用いる 5 節

御霊によって与えられた賜物は、能力、性質、性格などですが、それをどのように用いるのでしょうか？自分のためですか？それはノーです。だれのために用いるのですか？二つ目の原則はクリスチャンには主のために用いる賜物が与えられているということです。5 節に「**奉仕にはいろいろの種類がありますが、**」とあります。それぞれにふさわしい賜物が与えられているなら、そこには「**いろいろの種類**」の働き、奉仕が生まれます。だから、「**奉仕にはいろいろの種類がありますが、**」と記されているのです。そして、「**奉仕**」ということばは「仕える務め、世話」という意味があります。つまり、自分のためにするものではない。何かを得るためにするものでもないのです。また、自己主張するために賜物が与えられているのでもありません。仕えるために与えられているのです。では、だれに仕えるためでしょう？自分の主人に仕えるためです。それは先ほど見た通りイエス・キリストです。だから、5 節の続きに「**主は同じ主です。**」とあるのです。イエスに仕えてイエスのために奉仕の働きを為すということです。エペソ 4:12 に「**それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、**」と記されている通りです。

3) 賜物は同じ神が働いてくださる 6 節

賜物の三つ目の原則は「同じ神が働いてくださる」ということです。つまり、賜物は自分の力ではなく神の力によって為されるということです。6 節「**働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。**」。いろいろの賜物がありいろいろの奉仕があるなら、そこにはいろいろの働きが出てきます。「**働き**」とは「力の作用、力の活動」という意味で、働きに用いる、また、働きに必要な「力」のことを指しています。たとえば、物を運ぶときどのような力が要りますか？運ぶ力が必要です。また、計算したり文章を書くときは頭を使う力が必要です。これら体力、知力ともに神が与えてくれているとみことばは教えています。「**神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。**」と記されています。つまり、働きに必要な力は神のものであり、神が与えてくださり、神が働くことによってその働きができるわけです。ピリピ 2:13 「**神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。**」、神が願っておられる思いを神が働いてクリスチャン一人ひとりに与えてくださり、それに力を与えて事を行なわせてくださる、そのことを成し遂げさせてくださると言うのです。また、エペソ 1:19-20 にはクリスチャンのうちに働いてくださる神の力がいかにすごいものが記されています。「**また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることが出来ますように。:20 神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、**」、**「神の全能の力」**が働くのです。それは「**キリストを死者の中からよみがえらせる**」力、まさに、その力が私たちのうちに働いてくださると言うのです。神の全能の力が私たちのうちにあるなら、怖いものは何一つありません。

「賜物」を考えると、すべてが神によって為されるものであることが分かります。無償で与えられるものであり、与えられた後も自分の力ではなく、与えられている神の力によって働きを為すことができるのです。それゆえ、人間はこの「賜物」に関して何一つ誇ることはできません。すべて神が為してくださっているからです。私たちはこのことを正しく理解しておく必要があります。そうでなければ、何か自分がしたように勘違いしてしまうことがあるからです。私がこのようすばらしい働きをしたの

だと、高ぶる思いを持ってしまうかもしれません。また、目立たない働きを見下してしまうようなことが起こるかもしれません。また、私はこんな賜物しか持っていないと自己卑下をしてしまうかもしれません。これらは間違っただけです。同じ聖霊なる神がクリスチャンに賜物を与え、主なるキリストのためにその賜物を用いる、そして、その力の元は神が与えてくださっていると、そのことを私たちが本当に知るなら、私たちができることは賜物を与えてくださった神を誉め称えることだけです。

パウロ自身、そのことをよく理解していたから、彼はこのように告白しています。エペソ 3 : 7 **「私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。」**、まず、「神の力の働き」があり、それは「自分に与えられた神の恵みの賜物」のうちにその力が働いて、「福音に仕える」者となった、イエス・キリストのこと、イエス・キリストが語ったことを伝える者として用いられるようになった、「仕える者」となったと言うのです。

賜物の原則、神がクリスチャンに与えてくださった賜物はこのようなものであるとパウロは教えるのです。

2. 賜物の活用 7節

クリスチャンに与えられた賜物についての二つ目は「賜物の活用」ということです。賜物とはどのようなもので、賜物を与えられた一人ひとりはその活用して行かなければいけないということを理解する必要があります。また、ここでも三つのことを見て行きます。

1) 一人ひとりに与えられた賜物

一人ひとりに与えられた賜物を活用するという事です。I コリント 12 : 7 に「**しかし、おののおの**」と記されています。つまり、賜物はクリスチャンひとり一人に与えられているのです。それゆえに「私には賜物がありません」と言うことは決してできません。ある人は「私は確かに救われています。感謝です。でも、私には賜物なんて何一つないです。」と考へたり言ったりするなら、それは神をうそつき呼ばわりすることになるのです。なぜなら、みことばは「**おののおの**」と、ひとり一人に与えられているとはっきりと記されているからです。もし、ここに「ある特定の人に」とか「一部のの人に」と書かれているなら、「私には賜物はありません」と言うこともできるでしょう。でも、そうではないのです。みことばはクリスチャンひとり一人に賜物を与えられていると教えているのに、もし、私たちが「賜物がない」と言うなら神を信託していないこと、神を信じていないことになってしまいます。

また、パウロはエペソ 4 : 7-8 でも「**しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。:8**」そこで、こう言われています。「**高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。**」と記しています。ここでも私たちひとり一人は「**キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。**」と言うのです。つまり、一人ひとりにふさわしいちょうどよい賜物を与えられているのですと、そのことをこの箇所でも見る事ができるわけです。そして、I コリント 12 : 18 ではこのように記されています。「**しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。**」と。賜物は器官と同じようなものだと言うのです。私たちのからだを見た時にいろいろなものから成り立っていることが分かります。頭の先からつま先まで見る時、幾つの部分から成り立っているのか私は知りませんが、数えることができないほど多くの部分から成り立っているわけです。それが集まって一つのからだとなっているわけで、その器官の一つ一つはどの器官であっても、必要なものとして与えられています。すべてが必要なのです。

2) 賜物を用いるために与えられている

なぜ必要なのでしょうか？それは用いるために必要なのです。それゆえ、皆さんひとり一人が器官であり、器官として用いる必要があると言うのです。賜物とはどのようなものか、どのように活用するのか、二つ目は、用いるために与えられた賜物を活用することです。ただ何となく与えられた、与えられたからそのまま何もしなくてもいいというのではないのです。それをしっかりと使うために与えられたのです。7節に「**おののおのに御霊の現われが与えられているのです。**」と書かれていることから分かります。ここで少し考えてみたいことは「**御霊の現われ**」ということばです。これは何のことでしょうか？文脈から見る「御霊の賜物」のことを話しているのです。与えられるものは賜物ですから、「**現われ**」とは御霊の賜物のことです。では、なぜここで「御霊の賜物を与えられている」と書かなかったのでしょうか？この「**現われ**」ということばは「**明らかにする、公に示すこと**」という意味があります。つまり、賜物を用いることによってはっきりと現わされる、明らかにされる、公に示されるものであるということ私たちに教えているのです。

賜物は神がクリスチャンひとり一人に与えてくださったものです。しかし、その後はそれを使おう

うが使うまいが与えられた者の自由だ、勝手だと、そのようなものではありません。そうではなくて、賜物は与えられた後にしっかりと用いるため、使うために与えられているのです。用いなければ現わすことができません。例えば、力持ちを現わそうとするなら、重い物を持ち上げることによって「ああ、あの人は力持ちだ」と分かります。筋肉隆々の人がいてもひょっとするとその人は力がないかもしれません。重い物を持ち上げることによって明らかになるのです。そのように御霊の賜物ははっきりと用いることによって明らかにされるのです。そして、用いるために与えられているのです。

皆さん、賜物を用いておられますか？このように問うと「いや、確かに賜物が与えられていることは分かった。みことばがそのように教えてくれていることも分かった。でも、私の賜物は何か分かりません。」と答える方がいるかもしれません。ここにおられる皆さんの中で、自分自身が明確に「はい、私はこんな賜物を持っています」と真っ直ぐに手を挙げる人可以どれぐらいおられるでしょう？多くの方が「どうだろう…？」と考えるのではないかと思います。でも、自分の賜物を知っておくことは必要です。自分はこんなものを持っているからこのような働きができると言えるのです。では、私たちはどうすればいいのでしょうか？「分からないから何もできません。確かに何かあるでしょうが、分からないからどうしようもないです。」で終わってしまっただけではないのです。皆さんぜひ、主のために何ができるのか、どんなことができるか、教会のためにどんなことができるのか、また、周りにいる兄弟姉妹のために私はどんなことができるだろうかと考えてみてください。そして、何かできること気づいたことがあれば、そこから主のために働き、力を用いていってくださればと思います。そうすることによって、私はこんなことができた、神さまはこんなにすごい賜物を私に与えてくださっていたと、そのように気づくことになるかもしれません。また、ぜひ周り人たちにも「私の賜物は何でしょう？」と聞いてみてください。そして、聞かれた人は真剣に考えてぜひ伝えてあげてください。それによって自分がどんな賜物を持っているのかということを理解してくださればと思います。また、どんなことができるかな？こんなことができるかな？と考える時、今こういう必要があると思うけれど私にはとてもできないとなったとき、他の兄弟姉妹たちに「教会のことを思う時、このような働きがあるけれどどうですか？」と話してみてください。ひょっとすると、それを聞いた人が「それは私とても得意です！」と答えてくれるかもしれません。

つまり、賜物というのは、先ほど見たように、ひとり一人に違うものを与えてくださっているわけです。自分が持っていないものは当然、他の人が持っているわけで、それをを用いるために与えられているのです。また、先ほど見たように、力とは考える力、実際に行なう力がありました。ある人はしっかりと考える、そして、ある人はそれを行なうと、いろいろな賜物があるわけですから、そのようであってもいいわけです。いずれにしても、賜物を用いて行く必要があるのです。ペテロはIペテロ4：10で「**それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。**」と賜物について述べています。つまり、「**良い管理者**」は「**その賜物を用いて、互いに仕え合う**」ことをしっかりと理解しているのです。兄弟姉妹たちがお互いどうし賜物を用い合って行くこと、そのことが記されているのです。

3) 教会の益となるために与えられた賜物

例えば教会で互いに仕え合う時、そこに何が起こるでしょう？お互いの足りないところを補って仕え合っていく時、そこに全体の益というもの、つまり、教会の益が現われて来るわけです。だから、パウロはそのことも教えていることが分かります。賜物とはどのようなものかという三つ目のことは、教会の益となるために与えられた賜物、その賜物を活用して行く、つまり、「**教会の益となるために賜物は与えられている**」ことです。7節に「**みな**の益となるために、」と記されています。「**みな**」とは全体です。教会の益、そのためであると言います。また、Iコリント12：12には「**ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分とはたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。**」と記されています。先ほど、「賜物の原則」のところで見たとのは、キリスト、主に仕えることが賜物の原則だったわけです。では、その主に仕えることはどういうことでしょうか？主にはからだがある、そのからだとは同じ12：27を見ると「**あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。**」と記されています。つまり、クリスチャンひとり一人は「**キリストのからだであって**」、キリストがかしらであり、そして、その一人ひとは各器官であって、それぞれの器官としての働きを持っている、からだのそれぞれの賜物

を持っていると言います。

キリストのために仕えるということはこのからだに仕えることと同じなのです。私たちは与えられている賜物を用いているのでしょうか？教会の益となるために用いているのでしょうか？そのことを一人ひとりがしっかり考える必要があるのです。泉佐野の教会のメンバーで入院されている方がおられますが、先日、その病院にお見舞いに行った時のことです。ちょうど入院されている方のご主人が来られていました。ご主人はクリスチャンではないのですが、非常にうれしそうに私に笑顔で話しかけてくださいました。教会のメンバーのある方が家内が入院していることで家に葉書を送ってくださったのです、本当に嬉しいことだとおっしゃられたのです。それを聞いた時に、私は送ってくださった姉妹が自分の決めたことを本当に実践しておられると感じたのです。それは、毎年1月に泉佐野の教会では新年交わり会をもっていっしょに食事をするのですが、その時、今年はぜひ何か主のためにできることを証しましょうという機会を持ちました。そこでその姉妹は「では、今年は私は落ち込んでいる人や病んでいる人に葉書や手紙で何か書くことによって励ましを与えることができるように、そんな働きをぜひしたいと思います」とおっしゃられたのです。まさに、その通りに入院されている方のご家族に葉書を送っているということを知って、その姉妹が与えられた賜物、自分が考えたことをしっかりと忠実に行なっておられると、私は物すごくうれしく神を称えることができました。

「**みな**の益」、 「兄弟姉妹のために」ということですが、思いつくままに何をしてもいいのでしょうか？それはしっかりと考える必要があります。今紹介したのは、鉛筆によって人を励ますという働きでした。ある人は「私は筆不精でペンを執ることは苦手です。でも、私はこの口をもって人を励ますことが得意で大好きです。」と出かけて行って、実際に人を励ます働きをしようと思うかもしれませんが、よく考えなければいけません。入院されている方はどこかが悪いから入院されているわけですから、疲れている場合もあるわけですから。そのようなところに励ましに行き、例えば2～3時間も延々と話をするならどうでしょう？確かに、その人は善意を持って喜んでしようとするわけですが、聞いている人にとっては本当に感謝だけでも聞き続けているのはしんどい、もう帰ってもらえないかなあと思ってもなかなかそのように言えないわけです。私たちが賜物を用いて何かをしようとする時、それはあらゆる面で徳になることか、すべての人の益となることかということを考える必要があるのです。何をしてもいいというわけではないのです。

また、決して「私はこんな賜物を持っているからもうこれで十分だ」と現状で満足することがあってはいけません。パウロはこの同じIコリント14：12でこのように記しています。「**あなたがたのばあも同様です。あなたがたは御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会の徳を高めるために、それが豊かに与えられるよう、熱心に求めなさい。**」、確かに、賜物をもっと与えられるようにと願うわけですが、そこで注意しておかなければいけないことは「**教会の徳を高める**」ことです。自分が良く思われるために、自己誇示をするために与えてくださることはありません。しっかりと教会の徳を高めるために「**豊かに与えられるよう、熱心に求めなさい。**」、より多くの賜物を熱心に求めて行きなさいと教えてくれているのです。

皆さんは神から与えられた賜物を正しく理解していただいでしょうか？そして、正しく用いておられますか？今日は賜物について学んで来ました。賜物には三つの原則があり、それは御霊によって無償で与えられるもので、主に仕えるために与えられ、そして、その力は神が与えてくださっていること。そして、賜物の活用を見る時、ひとり一人に与えられていること、その賜物を用いること、そして、使わなくてもいいのではなくしっかりと用いるためであり、用いる時は教会の益となるために与えられている、それが賜物だということです。神はあなたにすばらしい賜物を与えてくださっています。それは用いるためです。

最後に、皆さんが親しい愛する人に何かプレゼントをあげる時、例えばそれが何か身につける装飾品であった時、冒頭にも言いましたが、こんなのが似合うかなと考えます。そして、あげたとき相手がどのようにしてくれることが一番うれしいですか？もらったから大切なものだからとダンスの一番底にしまっておかれるのではなく、それを身につけて用いられているならうれしいものです。その人のことを心から思ってプレゼントしたならなおさら「使ってください！」と喜びを得ることができるわけです。では、神が与えてくださった賜物をあなたはしっかりと用いておられるのでしょうか？もし、用いておられないなら神のすばらしい恵みを無駄にしてしまっていることになるのです。そうではなく、皆さんぜひ、あなたに与えられた神からのすばらしいプレゼントで

ある賜物を、主のために、教会のために、ぜひ用いていただければと思います。